

JpGU2025 パブリックセッション 『国連海洋科学の10年：SDG目標14の推進に 向けた今後の展望』について（報告）

海洋開発分科会

令和7年6月13日

文部科学省研究開発局海洋地球課

※JpGU ; Japan Geoscience Union、日本地球惑星科学連合

UNDOS ; United Nations Decade of Ocean Science for

Sustainable Development、持続可能な開発のため

の国連海洋科学の10年

国連海洋科学の10年：SDG目標14の推進に向けた今後の展望（概要）

- 日時場所：5月25日（日）9:00-12:15 幕張メッセ国際展示場
 - コンビーナ：斎藤 実篤、原田 尚美、藤井 陽介、堀井 元章
 - 発表者
 - 参加者：
会場：約50名
オンライン：約20名
 - ・国連海洋科学の10年ーそのゴールに向けて 道田 豊¹（1. 東京大学大気海洋研究所）
 - ・予測における海洋観測の重要性を明らかにする国連海洋科学の10年プロジェクトSynObsについて
藤井 陽介¹（1. 気象庁気象研究所）
 - ・国際黒潮研究プログラム – 2nd Cooperative Study of Kuroshio and its adjacent region (CSK-2)
永野 憲¹、野中 正見¹、安藤 健太郎^{1,2}、Lin Xiaopei³（1. 海洋研究開発機構、2. 東北大学、3. 中国海洋大学）
 - ・Argoの現状と国連海洋科学の10年：OneArgoの実現に向けて
須賀 利雄^{1,2}（1. 東北大学 大学院理学研究科、2. 東北大学・海洋研究開発機構変動海洋エコシステム高等研究所）
 - ・海洋科学掘削を通じた地球・海のダイナミクスへのリテラシー促進
諸野 祐樹^{1,2}（1. 海洋研究開発機構高知コア研究所、2. 日本地球掘削科学コンソーシアム（J-DESC））
 - ・海洋科学推進のための10年プロジェクト～海洋生物ビッグデータ活用技術高度化
赤松 友成¹（1. 早稲田大学 ナノ・ライフ創新研究機構）
 - ・漁師の性別は海にとって重要？ー地域水産業の持続可能性とジェンダーの関わりを科学するー
松原 花¹（1. 東京大学 大気海洋研究所）
 - ・アンケート調査結果を踏まえた海洋若手専門家（ECOP）の活動とネットワーク拡大
田中 広太郎¹、濱本 耕平²、松原 花³、森岡 優志⁴（1. 笹川平和財団 海洋政策研究所、2. 愛媛大学 沿岸環境科学研究センター、3. 東京大学 大気海洋研究所、4. 海洋研究開発機構）
 - ・未知なる深海を開くー潜水船パイロットが見る世界ー
飯島 さつき¹（1. 日本海洋事業株式会社）
 - ・市民が海洋リテラシーを育むためにはどのような機会があればいいのか
～学校教育や社会教育の場でおこなわれている取り組み事例の紹介～
今宮 則子¹、都築 章子¹（1. 特定非営利活動法人海の自然史研究所）
- 総合討論**
モデレーター：原田尚美（東京大学）
パネリスト
中川尚志（文部科学省）
牧野光琢（東京大学）
藤田 香（日経EGSシニアアドバイザー）
松原 花（東京大学）

国連海洋科学の10年：SDG目標14の推進に向けた今後の展望（総合討論）

まとめ 1：UNDOSの活動間の連携 ～One Oceanの精神で～

現状認識

- ◆ 国連海洋科学の10年に関して、日本から多様なプロジェクトが集まったのは、日本の海洋地球科学の底力。
- ◆ 様々な国際活動ともリンクしていて、日本の国際的なプレゼンスを示すために大いに貢献している。

ニーズ

- ◆ 多くの活動で、マンパワーや経済的支援が、まだ、足りていない。
- ◆ 参加の呼びかけ、社会への情報発信、産業界との連携、国際活動など、個々の活動が別個に行っている。
- ◆ 海洋は、One Ocean。その特性を生かし、上記の課題の同時解決を企図するような連携が必要。

今後の方向性（Action Items）

- ◆ UNDOS国内委員会（NDP）や文部科学省の協力で、
 - 課題間の連携の可能性についての分析。
 - 情報共有・相互理解のためのイベントの開催。
- ◆ プロジェクトや分野をまたいだ横の連携をイノベーティブなものにするための軸としてECOPに期待し、
 - NDPによる若手ワークショップ等への支援。
- ◆ UNDOSプログラム・プロジェクト間の協力で
 - 一般向け、産業界向けアウトリーチイベントなどを企画。

国連海洋科学の10年：SDG目標14の推進に向けた今後の展望（総合討論）

まとめ2：UNDOSの活動と社会との接点 ～科学と社会をつなぐ～

現状認識

- ◆ 社会のニーズを踏まえる
 - Ocean We Want Global Surveyなどを参考に、世界と海洋科学とのギャップを埋める方策を議論する必要
- ◆ 社会に届くUNDOSの発信
 - 科学データの価値を「見える化」し、産業・政策・市民に伝える努力が不可欠
 - 市民科学や環境DNAなど、新しい科学参加の形が登場
- ◆ 民間との連携の深化
 - 水産DXやブルーカーボン等、科学データの利活用が産業界の変革に貢献する可能性
 - データ駆動型ビジネスと科学の融合により「成長産業」への転換を図る可能性
 - 日本における産業界との協業の遅れ
- ◆ 次世代・多様性の視点
 - ECOPのネットワークが、世代・地域・分野を越えた連携のハブとなる可能性
 - ジェンダー・地域・セクター間のバランスある議論と協働が重要

今後の方向性（Action Items）

- ◆ 科学×産業×社会の“対話の場”を拡充
 - 展示会・国際会議・万博等を活用し、共創の現場を広げる
 - 体験型のイベントの活用
- ◆ オープンデータと人材育成の推進
 - 科学データの公開と、それを活用できる人材・企業の支援
- ◆ ECOPを軸にした多様なつながりの強化
 - SNS・学会連携を通じて、若手が主体となるネットワーク形成
- ◆ 社会の“声”を反映した研究設計・発信
 - 市民や企業が求める情報ニーズの把握と、科学の翻訳・応用
 - Earth science week Japan (JPGU)、STEAMへの協力
 - 海洋観測の意義への理解の醸成。特に、予報を通じた工夫。

○ 科学技術・学術審議会 海洋開発分科会

- 6月13日、8月1日に開催予定
- JpGUなど国内外の取り組みについて適宜報告。

○ Japan Geoscience Union Meeting (JpGU) @千葉（幕張メッセ）

- 5月25日～5月30日 ※日本海洋学会の春季大会と合同開催
- 日本地球惑星科学連合（JpGU）の国際学会。OceanDecadeに関するセッションを開催。

○ One Ocean Science Congress @フランス（ニース） ※IOC総会、執行理事会 @パリ：6月24日～7月3日

- 6月3日～6月6日
- 国連海洋会議（UNOC 3（同9-12））における科学に関するイベント。全体会議やタウンホールミーティング、個別テーマの講演が行われる。
また、6月3日には欧州海洋科学掘削コンソーシアム（ECORD）が主催する、海洋科学掘削に関する政策担当者向けのUNOC3サイドイベントが実施される。

○ Foundations Dialogue meeting @東京

- 9月3日～9月5日
- 笹川平和財団海洋政策研究所主催。財団が主体となり、OceanDecadeに関する戦略について検討する会議。

○ 日本海洋学会 @函館（北海道大学）

- 9月21日～9月25日
- 研究発表、シンポジウム等を実施。

○ 「海洋生物ビッグデータ活用技術高度化」事業シンポジウム @東京（国連大学）

- 10月31日
- OceanDecadeActionのプロジェクトとして申請している、当省委託事業のシンポジウム。
- 当分野に関連する海外からの研究者等も招聘し、これまでの本事業の成果や今後の展望についての講演やパネルディスカッションなどを予定

○ North Pacific Marine Science Organization (PICES) 2025 @横浜

- 11月8日～11月14日
- 北太平洋海洋科学機関（PICES）の年次会合。北太平洋海域及び隣接海域における海洋環境や気候変動等の意見交換を実施。

○ SynObs国際ワークショップ2026 @青森（むつ市 下北文化会館）

- 2026年8月24日～8月30日
- OceanDecadeActionのプロジェクトの1つ、「海洋予測のための相乗的な海洋観測網（SynObs）」のシンポジウム。